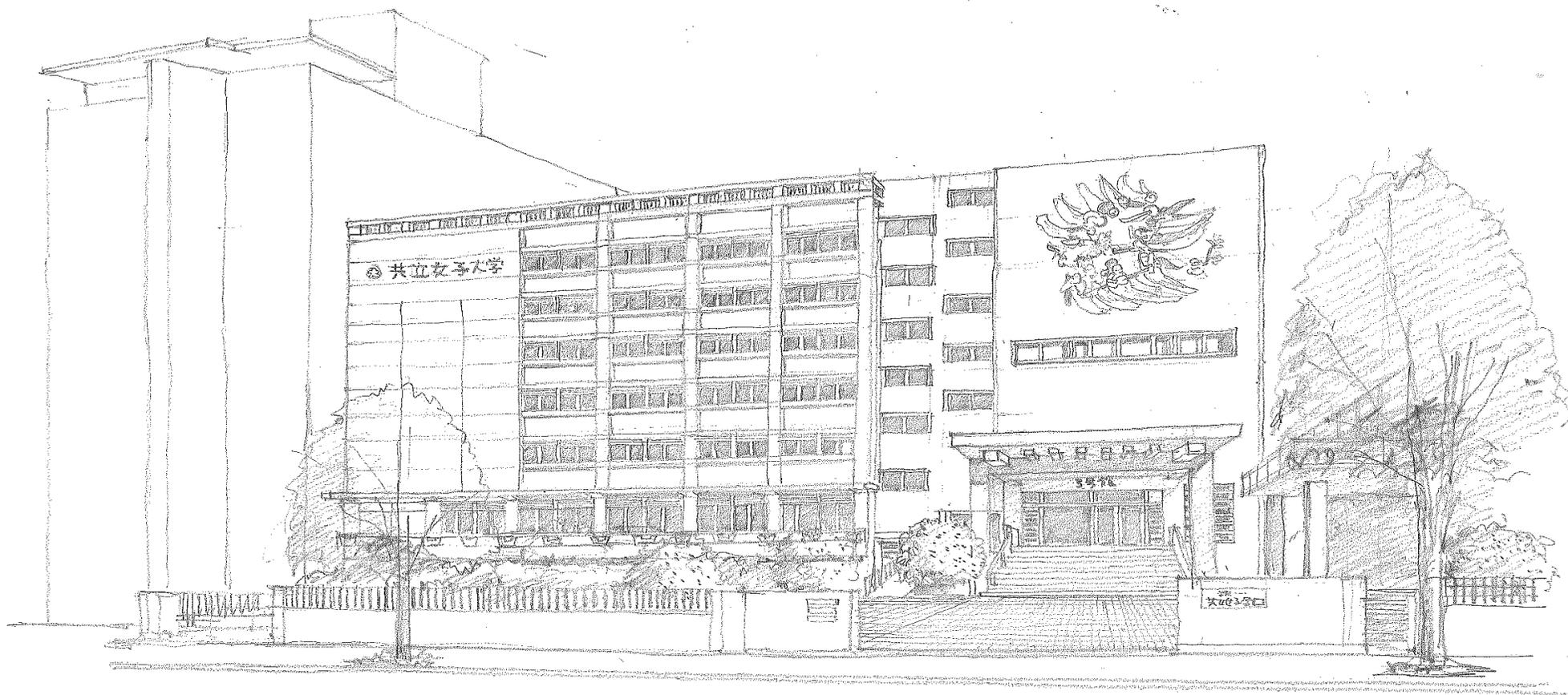


# 共立女子大学看護学部 10 周年記念誌



共立女子学園 3号館 2024.01.11 卒



## 目次



表紙の3号館のデザインは、堀 啓二建築デザイン学部長（2023年度当時）が、看護学部10周年に寄せて、描いてくださいました。

1. 学部長経験者挨拶	.....	1
2. 記念講演	.....	5
3. 卒業生シンポジウム	.....	7
4. 座談会	.....	8
5. 卒業生からのメッセージ	.....	9
6. 看護学部10年のあゆみプラス	.....	16

編集後記

## 1. 学部長経験者挨拶

共立女子大学看護学部 10 周年に寄せて—実践力と人間力を育む看護教育の歩み—

看護学部教授（第 4 代看護学部長）

中原 るり子

共立女子大学看護学部は、2013 年の開設以来、「女性の自立と自活」という建学の精神を受け継ぎ、看護専門職として社会に貢献できる人材の育成に力を注いでまいりました。このたび、開設から 10 年を迎えるにあたり、これまでの歩みを振り返り、学部を支えてくださった皆様に深く感謝申し上げます。

本学部は、単に資格を取得するための場ではなく、看護職としての「実践力」と「人間力」を磨く教育の場として、その存在意義を築いてきました。開設当初より、臨地実習に向けた準備教育として OSCE（客観的臨床能力試験）を導入し、模擬患者を対象とした演習を通して、学生の看護実践能力を客観的かつ体系的に評価する仕組みを構築してきました。これにより、学生たちは現場に出る前に自らの課題に気づき、臨床現場での学びをより深いものにする力を養っています。

さらに、実践力を育む教育環境の整備として、2023 年には高性能のシミュレーター 6 体と模擬電子カルテを備えた都内でもトップレベルの看護シミュレーションルームを開設しました。この施設では、臨床現場さながらのシナリオを通じて学生が判断力・対応力を磨くことができ、ICT を活用した高度な振り返り（デブリーフィング）にも対応しています。こうした環境のもと、学生たちは安全かつ効果的に「臨床判断力」や「チームでの連携力」を習得し、実習や将来の現場に自信を持って臨むことができるようになっていきます。

看護学部がこの 10 年間で確かな成長を遂げることができた背景には、実習教育の充実があります。開設当初は、実習施設の確保に多くの困難を伴いましたが、学生の誠実な姿勢と、卒業生たちの着実な活躍によって信頼を獲得し、今では多様で質の高い実習先を安定的に確保できるようになりました。このことは、教育の質の向上と、卒業生の社会的評価の高さを相互に裏付けるものであると考えています。

また、本学部の教育の特色として、4 年間を通じて行われるリーダーシップ教育があります。これは学部独自の取り組みにとどまらず、大学全体が教育目標として掲げている「共立リーダーシップ」の育成に位置づけられています。すべての学生が、チームの中で自らの役割を理解し、他者と協働しながらリーダーシップを発揮することを目指して、さまざまな科目や実習、課外活動を通じてその力を磨いていきます。看護学部の 10 年は、教育の成果を一人ひとりの学生の姿に映してきました。

卒業生たちは、看護師・保健師として第一線で活躍するだけでなく、助産師課程や大学院へと進学し、より専門性の高いキャリアを歩んでいます。さらに近年では、本学の卒業生が教員として戻り、後進の育成に携わってくれるようになりました。学生としての経験を教育に還元してくれる彼らの存在は、学部にとって大きな力となっており、まさに教育の循環が形になってきた証でもあります。

2017年には大学院修士課程も開設され、小規模ながらも社会人院生を中心に、臨床現場での実践知と学術的探究をつなぐ教育を展開しています。在籍する院生たちは、臨床や教育、保健行政など多様な場面でリーダーシップを発揮し、現場に新たな視点をもたらす存在として活躍しています。学部と大学院の連携も進み、卒業生が生涯にわたって学びを深められる環境づくりにも力を入れています。

教育の充実と同時に、学内外のサポート体制も整備されてきました。担任制によるきめ細やかな学生支援、国家試験対策委員会による組織的な学修支援体制、就職・進学支援など、学生一人ひとりの目標を共に描きながら支える体制が着実に根づいています。附属病院を持たない本学部だからこそ、学生の進路の幅を広げ、多様なキャリア形成を後押しする取り組みが可能になっていると感じています。

10周年という節目は、決して通過点ではなく、次の10年を見据える起点でもあります。これからの社会は、医療・保健・福祉のいずれの分野においても予測困難な変化が加速し、看護職に求められる役割や能力も複雑化していくでしょう。そのような時代においても、看護の根底にある「人を理解し、人を支える力」を大切に、変化に対応できる柔軟な実践力と、高い倫理観をもつ看護職の育成を、今後も看護学部の使命として果たしていきたいと考えています。

最後に、看護学部をともに創り、支えてくださった教職員、実習施設関係者、卒業生、保護者の皆様、そして日々成長を続ける学生たちに、心より感謝申し上げます。これからの10年も、共立女子大学看護学部が、人と社会の未来を支える看護職の育成に誠実に取り組み続けることをお誓い申し上げ、10周年の挨拶とさせていただきます。

## 看護学部 10 周年に寄せて

看護学部教授（第 3 代看護学部長）

北川 公子

私が本学に着任したのは、看護学部が開設した 2013 年 4 月です。共立女子大学とのご縁は、学部開設に先立って共立女子短期大学看護学科におられた加藤令子先生（現 関西医科大学）にお声かけいただいたことでした。総合大学であること、学部として独立していること、東京のど真ん中であること、そして私の専門である「老年看護学」の教育研究グループを創れることに魅力を感じ、着任を決めました。

私が本学の看護学部長を仰せつかったのは、日下和代先生の定年退職の後を受けた、2019 年 4 月でした。この年は、学部設置からの 4 年（2013 年度～2016 年度）に続く、大学院設置から 2 年間（2017 年度～2018 年度）、いわば学部・大学院の創成期を引き継ぐ、そのような時期でした。

当時、看護学部は、学生が着実に学び、単位を修得して、進級し、看護師ライセンスを取得する道筋を支援することに専心していました。そのためのルール運用の厳密さが、学びの楽しさや安心感の低減を招き、それが学生の退学や転学部に繋がり、満足度を低下させ、受験の志願者を減らす、という悪循環を招いていました。このような状態から、大学執行部の助言や学部教員の多大な協力のもと、学生が安心し、満足感をもって卒業できる学部の雰囲気づくりに舵をきった矢先、新型コロナウイルス感染症によるパンデミックに見舞われました。

2021 年度からの学部長 2 期目は、コロナ禍において、実習を含む教育を進めることや、いったん休止した実習を再開するための準備に忙殺されました。当時の記憶があやふやなくらい本当に大変でした。どうやってあの大変な状況を乗り越えられたのか。それは、教員組織が一丸となって教育を支えてくれたこと以外、理由が見当たりません。

このように、私がつとめた 4 年間は、「創成期」に続く、「転換期」だったように思います。何とか学部を破綻させることなく過ごすことしかできなかった 4 年間ですが、学部の発展に貢献できたことがありました。それは、2022 年 1 月に申請した「ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」が採択され、900 万円の助成金を獲得したことです。助成金の申請は、獲得が見込める申請書の作成、そのための話し合いや事務局を巻き込むことなど、どれも「プラス  $\alpha$ 」の業務となります。助成金を獲得すれば、それはそれでさらに「プラス  $\alpha$ 」の業務となります。それでも、助成金を申請するという学部の熱意、見込みのある書類が作れるという教員組織の地力を、大学の内外に示すことが、あの時、学部の長としてやらなければならないことだと強く思って取り組みました。何よりありがたかったことは、

教員組織、特に教授たちがその必要性を理解し、多くの役割を果たしてくれたことでした。

このようにして学部の「転換期」を何とか乗り切り、次の「発展期」へとバトンタッチする過程に参加できたことは、本学に着任しなければ経験できなかった冒険だと、ありがたく思っています。

## 2. 記念講演:テーマ「10年後の看護学部に向けて」

2023年12月16日（土）、3号館を会場として、記念講演会を開催しました。

はじめに、来賓の方々にご挨拶を頂きました。

\*清水 潔理事長

\*川久保 清学長

\*日下 和代先生(第2代看護学部長・清泉女学院大学看護学部教授)

清水理事長からは、文部科学省における教育行政の中でも、看護教育の強化・推進のために尽力された経験から、看護システムや看護職の養成のあり方、そして、現行の医療システムの課題もお話しく下さいました。10年後を考えたとき、変わらないこともあるだろうが、これまでとは大きく異なってくることが予想されるが、今後の看護学部の取り組みを楽しみにして下さっていることが述べられました。

川久保学長からは、看護学部は、本学の中では若い学部として開設であるが、学部教員が一致団結して学生教育に取り組んでおり、その結果として、看護師・保健師の高い国家試験合格率に結びついていること、また、地域に密着した看護職とした活動が実践できているのではないかと評価して下さいました。さらに、看護学部が、大学を先導して「リーダーシップの共立」を発揮することを期待して下さいました。

日下教授は、初代学部長である大関武彦先生が病気で倒れられた後、第2代看護学部長として、看護学部の牽引して下さいました。日下先生が学部長に就任された時期は、学部の完成年度を迎えるところであり、看護学部をより発展させていくために、大学院(看護学研究科)を設置し、続いて、看護師教育のみでなく、2019年4月に保健師課程を設置すべく、準備をされたことが話されました。日下先生には、看護学部の基盤をつくることに全精力をつくして下さいましたことに、改めて感謝申し上げます。

続いて、「10年後の看護学部に向けて」というテーマで、川崎誠治先生（社会福祉法人三井記念病院 院長）及び碓井真紀先生（同病院副院長・看護部長）を演者としてお迎えして、ご講演を頂きました。

在校生・卒業生が、「共立リーダーシップ」をどのように実践で発揮しているのかということや、三井記念病院がめざすことを踏まえて、本学部に期待することをお話し頂きました。

学生、そして、教員に、温かいエールを頂くとともに、これからの看護学部がめざす教育について、大きな示唆を頂きました。

共立女子大学 看護学部  
10周年記念講演会・  
卒業生シンポジウム  
「10年後の看護学部に向けて」



2023年12月16日(土)  
第1部 10:00~11:10  
第2部 11:20~12:50  
共立女子大学3号館610講義室

講演会場でのカメラ・スマートフォン・タブレット等による撮影・講演音声の録音はご遠慮ください。



### 3. 卒業生シンポジウム:テーマ「10年後の看護学部に向けて」

記念講演に引き続き、第2部として、病院、自治体、大学に勤務する卒業生を招聘し、「10年後の看護学部に向けて」というテーマで、卒業生シンポジウムを開催しました。

<登壇者>

座長：共立女子大学看護学部・教授 西田 志穂

1期生 海老根桃香さん

2期生 堀内 詩織さん

5期生 中嶋 千尋さん

7期生 時田 玲奈さん

さまざまな分野で活躍している卒業生から、次々に、学生時代の思い出話が話されました。学年は異なっても、共通することもあり、その点については、参加してくださった卒業生の間で大いに盛り上がりました。

また、現在の仕事について、大学で学修したことがどのように関連するのかということや、それぞれの経験年数から見てきたことを熱く語ってくれました。そして、異口同音に、「共立で学んだことが確実に実践できている！」とコメントされたことに、教員たちは、何事にも代えがたい喜びを感じました。

最後に、卒業生たちからは、それぞれの今後の夢（野望を含む）が述べられました。どの夢も、スケールの大きな夢でしたが、その夢を実現するために今から取り組んでいることも話され、卒業生たちは、確実にその夢を実現し、ますます活躍していくことができそうだと感じました。

シンポジウムに参加した在校生は、このような卒業生の姿に大変刺激を受け、自身も頑張っていこうという強いモチベーションにつながったようでした。

「10年後の看護学部に向けて」は、卒業生の道がさらに拓けていくことが予想され、頼もしく思いました。

#### 4. 座談会:テーマ「実習施設と大学がともに進める教育と実践」

2023年12月8日（金）、「実習施設と大学が共に進める教育と実践」というテーマで、本学と特につながり深い実習施設の責任者にご参集頂き、座談会を開催しました。

＜座談会メンバー＞

共立女子大学看護学部長・教授	中原るり子
三井記念病院副院長・看護部長	碓井真紀先生
関東中央病院副院長・看護部長	木村弘江先生
小石川医師会訪問看護ステーション管理者	山口智子先生
東京臨海病院看護部長	佐々木誠子先生

看護学部が10周年を迎え、これから学部がさらに発展していくためには、実習施設と看護学部（大学）が、どのように教育と実践を「ともに」進めていくことができるのかということについて、率直に意見交換を行いました。

各実習施設において、本学の学生の実習や採用・就職後の教育にかかわる中で、感じていらっしゃる学生・卒業生の特性が話され、共通して言われたことは、患者（利用者）さんに対して、しっかり向き合えるということが「強み」であるということでした。また、大学が教育の基盤としている「共立リーダーシップ」を発揮しており、『共立カラー』に通じるようだ」ということが話されました。

さらに、世の中が目まぐるしく変化（転換）している現代だからこそ、将来を見据えながら、今日的な保健医療福祉の課題や社会の要請に応えられる看護職をどのように育てていくことができるのかということについても、各実習施設と本学が協力しながら取り組めることは何かということ意見を交換しました。

本学部では、適宜、各領域と実習施設が個別に協議する機会を設けており、学部全体としては年1回、実習運営合同会議を開催しています。しかし、これまでテーマを設定して議論を行ったり、実習施設同士が相互の取り組みや課題を共有したり、それについて意見を交換する機会はなかったため、今回は具体的な検討につながる貴重な機会となりました。

## 5. 卒業生からのメッセージ

看護学部10周年にあたり、卒業生がメッセージを寄せてくれました（いずれも、2024年3月時点のものです）。

< 1 期生 梅田葉那さん >

私は共立女子大学で様々な専門分野の先生方から授業を受け、興味のある分野を見つけることができました。終末期についての授業が印象に残っており、卒業後の臨床の現場で倫理カンファレンスとして「終末期の緩和治療」をテーマにあげたり、ケーススタディで終末期患者のケア、意思決定支援について実践する機会を設けました。臨床で更に学びなおしたり、患者に実際に関わることで学生時代の授業からの学びがつながり、知識を深めることができたと感じています。

印象に残っていることは領域別実習前の OSCE という試験です。実際の臨床の現場で起こりうる患者対応をその場で考えながら看護技術を行う試験を通して、自信をもって臨地実習に参加することができました。また、OSCE では試験前に友人達と多くの時間をかけて話し合い、計画を練ったり、練習を重ねたりする時間を通し、学生同士の繋がりも強くなったと思います。何度も看護の場面を評価、修正することでよりよい看護を検討していくといったプロセスは卒業後臨床現場でのカンファレンスや多職種連携と似たような学びであったと思います。

私は卒業後、総合病院に就職し、新卒者教育を経験して現在、共立女子大学で助手として働いています。今までは自分が患者さんにどんな看護を提供したいかが中心でしたが、現在は学生さんにどんな看護師になってほしいか、看護が楽しいと感じてもらえるように関わりたいと考えながら働いています。学生さんの考える看護、新しい価値観に触れることで、学びの多い日々を送っています。看護職の働く場は様々であり、その場所ごとに異なるやりがいがあるのだと働きながら感じています。

共立の先生方は親身になって日々の学習のことから実習、就職後について相談に乗ってくれる先生方ばかりです。私も卒業後に働いてからの悩みや今後のキャリアについて相談に乗ってもらいました。先生方と話すことで、共立で学んだことを振り返り、自分の看護観について考え直すきっかけにもなっていました。迷ったとき、困ったときは先生方を頼りにしながら自分の目指す看護師像に向かって頑張りたいと思います。また、同級生とは今でも様々なことを相談するような関係でいることができます。学生時代に苦労を共にした経験はかけがえのない物になるので、仲間との時間も大切に学生生活を楽しんでほしいです。

< 1 期生 加藤弥生さん >

この度は、共立女子大学看護学部創立 10 周年、誠にありがとうございます。

看護学部 1 期生として入学してから、もう 10 年経ったのだと、月日の流れに驚くとともに、卒業後も変わらずなにかの際にはご相談させていただき、力になってくださる先生や、友人と出会うことができ、共立女子大学に入学して良かったなと心から思います。

学生時代は、沢山の講義や PBL に実技演習、今思うとどのようにこなしていたのだろうと不思議なくらい科目数があったテスト。。。そんな日々の学修をはじめとし、OSCE や長きにわたる実習、国家試験等乗り越えられたのは、時に厳しく、(ほとんど) あたたくご指導くださった先生、一緒に頑張る友人がいたおかげだと思います。また、みっちりスケジュールのなかでも、楽しみとして、モーニングを食べてから 1 限の講義に出席することや、空きコマには大学を起点とした街歩き (今思えば地区踏査の最初の 1 歩だったかも?)、放課後にはサークル活動やアルバイトをするなどアクティブに学生生活を過ごしていました。現役生のみなさまも、何気ない毎日を大事に、たくさんの人と出会い、様々な経験をしながら今だからこそ得られる学びや感性を磨いてほしいです。

実り多い学生時代のなかでも一番の思い出は、地域在宅看護学領域ゼミに所属し、実施した看護研究です。卒論提出及び発表会の時期には、研究室のいつもの席にてそれぞれお気に入りのカップに淹れたお茶をいただきながら、閉館までゼミ生同士意見を出しあってブラッシュアップを重ね、「また 12 時間後～」と、次の日も朝早くから作業をしていました。改めて、朝から晩までご指導いただいた先生には感謝の気持ちでいっぱいです。研究を通して論理的思考力だけではなく、研究の心構えとして、インタビューをお願いする際や実施時の心配り等細かいところもしっかりと学ぶことができました。学部のときに研究をする上での基盤がつくられたおかげで、修士課程での研究活動に活かすことができた実感しております。

10 年という節目を迎えた看護学部ですが、この先も 20 年、30 年…と、「誠実、勤勉、友愛」の校訓のもと、日々学んだ共立出身の看護職が増え、活躍していくことを願っております。私自身も共立で学んだ看護を基盤に、常に自己研鑽をし続け、産業保健師として尽力していく所存です。

< 4 期生 青木藍加さん >

私は共立女子大学での 4 年間で自分の進みたい道を決めやり遂げる力、そして、看護の基盤である「寄り添う」ということを身につけることができました。

私は今、助産師として働いています。助産師の道を選択して心から良かったと思えているのはこの道に導いてくださった先生方の存在があったからです。大学 3 年生の後半まで助産師になることは全く想像もしていませんでした。母性看護学の実習を機に母性看護学分野に興味を持ち助産師になることを決めました。そこからは受験のための準備や勉強に必死でした。しかし、その時間があったからこそ自分がやりたいことは何かを考え、助産師になるという目標を強く持ち進むことができました。先生方の存在、支えがあったからこそやり遂げることができたと強く感じています。

また、臨床の現場に立つと知識や技術は自然と身につくことが多いと思います。しかし、患者さんに「寄り添う」ということは大学での 4 年間であったからこそその学びだと思っています。私にとって「寄り添う」ということは患者さんの思いを共に共有し合い、辛いときは共に悲しみ、嬉しい時は共に喜び合う関係性であると思っています。その中で、患者さんに今必要なことは何か考え、選択肢を提供しながら患者さんと共に考え共に前に進むことができるような支援が重要であると思います。

私は臨床にでて 1 年目の頃、落ち込んでばかりでした。複数の患者さんを受け持つようになり、やらなければならないことがたくさんある中で患者さん一人一人と丁寧に関わることができていないという思いが強かったです。しかし、学生時代を思い返すと、「学生だからこそできることは何か」を常に考えさせてくださる先生方の存在がありました。正直、臨床の現場では患者さんと関われる時間が少なくなってしまうこともあります。でも、自分にできることは何かを考え行動するという基盤を大学で教えて頂けたからこそ、その学びを少しずつ臨床で活かすことができ、徐々に楽しさを感じるできるようになりました。

共立女子大学看護学部では看護に関する知識技術だけでなく教養分野に関する知識や人間性を養うことができます。私は、共立女子大学での 4 年間であったからこそ今の自分があると思っています。授業や実習、課題と大変なことも多いと思いますが、それを共に乗り越えた仲間は今でもかけがえのない存在です。看護師になるという同じ目標を持った仲間と共に大学生活を楽しみながら、そして、学生としての時間を大切に過ごしてください。共立女子大学看護学部で学んだ皆さんが素敵な看護師さんとして活躍されることを楽しみにしています。

< 4 期生 上田爽可さん >

私が共立女子大学を卒業して4年が経過し、時の流れの早さに驚かされています。今回、看護学部設立から10周年を迎えたと言うことで、母校が日々歴史を刻んでいることをとても嬉しく思います。

看護学部での4年間は、大切な仲間に出会えた、自分にとってかけがえのないものでした。その中でも病院や施設など様々な場所で行った実習はどの学生にとっても印象深いものだったかと思います。

私の中で印象に残っている実習は初めて受け持ち患者を持ち、看護展開を行った基礎看護学実習Ⅱです。その実習では脳梗塞を発症した高齢者の方を受け持たせていただきました。私生活で高齢者と関わる事がほとんどなかったため混乱もあり、自分の中で関わり方に悩むことや落ち込むこともありました。しかし、短い実習期間の中で自分なりに努力を重ねて関係性を築けたことや、少しずつ回復の過程を辿っていく姿をすぐそばで見させていたけたことで日々喜びを感じていました。実習最終日の挨拶をした際には、受け持ち患者様が理学療法士の支えのもと、ナースステーションまで歩いてきてお見送りをしてくださいました。その時に向けられた、「良い大人になりなさいよ！」という言葉は今でも心に残っています。また、大変な実習を支えてくださった病院関係者の方や実習指導者、共に助け合った仲間たちへの感謝の気持ちも今後忘れずにいきたいと感じた実習でもありました。

その後、領域別実習を終え無事に国家試験に合格し、現在も看護師として働いています。部署異動も経験し、赤ちゃんから高齢者まで様々な年代の看護実践を行っています。また、リーダー業務やプリセプター業務もさせていただき、大変なこともあります。これからも自分の夢や目標を見失わず、感謝の気持ちを忘れずに行動していきたいと思っています。

看護師という仕事は言葉では一括りにはできないほど、色んな仕事がありさまざまな分野で活躍している仲間がいます。共に看護学生生活を乗り越えた仲間たちとは、今でも連絡を取り合い励まし合う仲です。在学生の方やこれから入学する方も自分に合った働き方を追求して、自分らしく看護実践する場を見つけてもらえたらなと思います。いつか、一緒に働けることを楽しみにしています。

< 5 期生 澤田紗希さん >

共立女子大学看護学部 10 周年おめでとうございます。先生より、ぜひメッセージをとということで、大学時代のことを懐かしく思い出しながらこれを書いています。

私は看護師になりたいという夢を諦められず、36 歳という年齢でしたが、2017 年、共立女子大学看護学部に入學しました。入學してみると、看護学部の学生たちは年齢が 10 代だったこともあり、最初はなかなか打ち解けることができず、毎日が不安と緊張だったのを覚えています。しかし、学生たちは分け隔てなく私と接してくれたこと、また、先生は親身になって相談に乗ってくれたおかげで、そんな不安や緊張もいつしか吹き飛んでいきました。

大学で一番印象に残っているのは、実習やゼミも含めた、グループでの学習です。もともと私は自分の意見をはっきり言えない性格で、人前で発表することが苦手だったので、最初はグループワークに苦手意識がありました。しかし、皆で協力することで、新たな発見があること、さらに学びを深めることができることがわかり、苦手意識もなくなっていきました。そしてその経験が、今の看護師としての仕事に繋がっています。

私は、現在、精神科病院で勤務しています。特に、アルコールや薬物、ギャンブルに依存してしまう人たちの看護に携わっています。私の病棟では、ひとり一人の患者さんを全スタッフで看護しています。また、医師、看護師、精神保健福祉士、薬剤師、作業療法士等、あらゆる職種が入院前から入院後まで関わります。また、家族とのカンファレンスも多くあります。そのような職場の中で、大学時代に経験した、皆で協力するという、グループワークの経験が今の仕事に大変役立っています。今では、人の意見もしっかり聞き、自信をもって自分の意見も言えるようになりました。看護師はやりがいもあるし、患者さんが元気になるのを見届けられる素敵な仕事です。それを私は日々感じています。アルコール離脱症状で拘束されていた患者さんが退院し、久しぶりに病院に受診へ来たとき、「あれから(お酒を)一滴も飲んでないよ」と笑顔で会いに来てくれるのが、やりがいを感じるときでもあり、嬉しい時でもあります。そんな毎日を送ることができ、改めて看護師になって良かったと思います。

大学時代のことを振り返ってみて、育児、家事を抱えながらの課題、演習、実習、試験、辛くてやめなくなった時もありました。3 年生の OSCE も一度落ちてしまったとき、仲間ですら合格できるか協力し合い、再試験で無事全員合格した事は、今ではいい思い出です。本当に仲間、先生がいたから乗り越えられたと改めて思います。共立女子大学で学んで本当に良かったです。看護学部を期待することとしては、看護技術や知識だけでなく、生きづらさを抱えた人に寄り添えるような優しい人間性を持った人を育ててほしいと思っています。

< 6 期生 吉井晴香さん >

共立女子大学看護学部創立 10 周年おめでとうございます。6 期卒業生の吉井晴香です。卒業生として、看護学部が 10 年の節目を迎えられたことをとても嬉しく思います。

私は今、地元の病院でやりたかった救急分野の看護師として働いています。大学時代の 4 年間は大変なことも多かったですが、それ以上にとても濃く充実した 4 年間でした。これから大学生活で学んだことや印象に残ったことを、3 つ取り上げてメッセージを書かせていただこうと思います。

1 つ目は基礎看護の授業についてです。手指消毒やベッドメイキング、清潔ケア、バイタルサイン測定や採血の方法、看護過程の展開など沢山記憶にあります。先生方の見本の動画を見ながらの練習、根拠まで考えて作った虎の巻、身だしなみ等、その当時は大変でしたが、看護の基礎であり、今でもそれらがとても役立っていて、基礎の大切さがわかりました。熱心に教えてくださった先生方、一緒に学んだ友人たちに感謝したいです。基礎看護だけでなく、どんな授業でもそうですが、一生懸命学んだことは絶対に役に立ちます。授業は大切に受けてほしいです。

2 つ目はグループワークです。大学には様々な考えや性格の人がいて、グループワークを通して多くの人と関わることができました。交友関係が広がること、新たな思考を見つけられること、そして、1 人で学ぶより学びが何倍にもなることがグループワークの良さだと分かりました。特に私たちの代はコロナ禍真っ直中で、授業や実習、ゼミ活動もオンラインで行うことが多かったです。顔が見えない中でもどうしたらうまく進めていけるのか、みんなが納得した答えを出せるのかを考えながらコミュニケーションをとりました。そのため、仲間と試行錯誤して成し遂げたときの達成感はとても大きかったです。また私はそれらを通して、色々な人の考えを受け入れ、それぞれの人の良さを見つけることができるようになりました。そして、協調性が身につき、視野が広がったと感じています。これらは今、患者さんと家族との関わり、看護師スタッフや多職種との関わりを通して大いに役立っています。また、一緒に頑張ってきた仲間は今でも連絡を取り合う、大切な友人にもなりました。

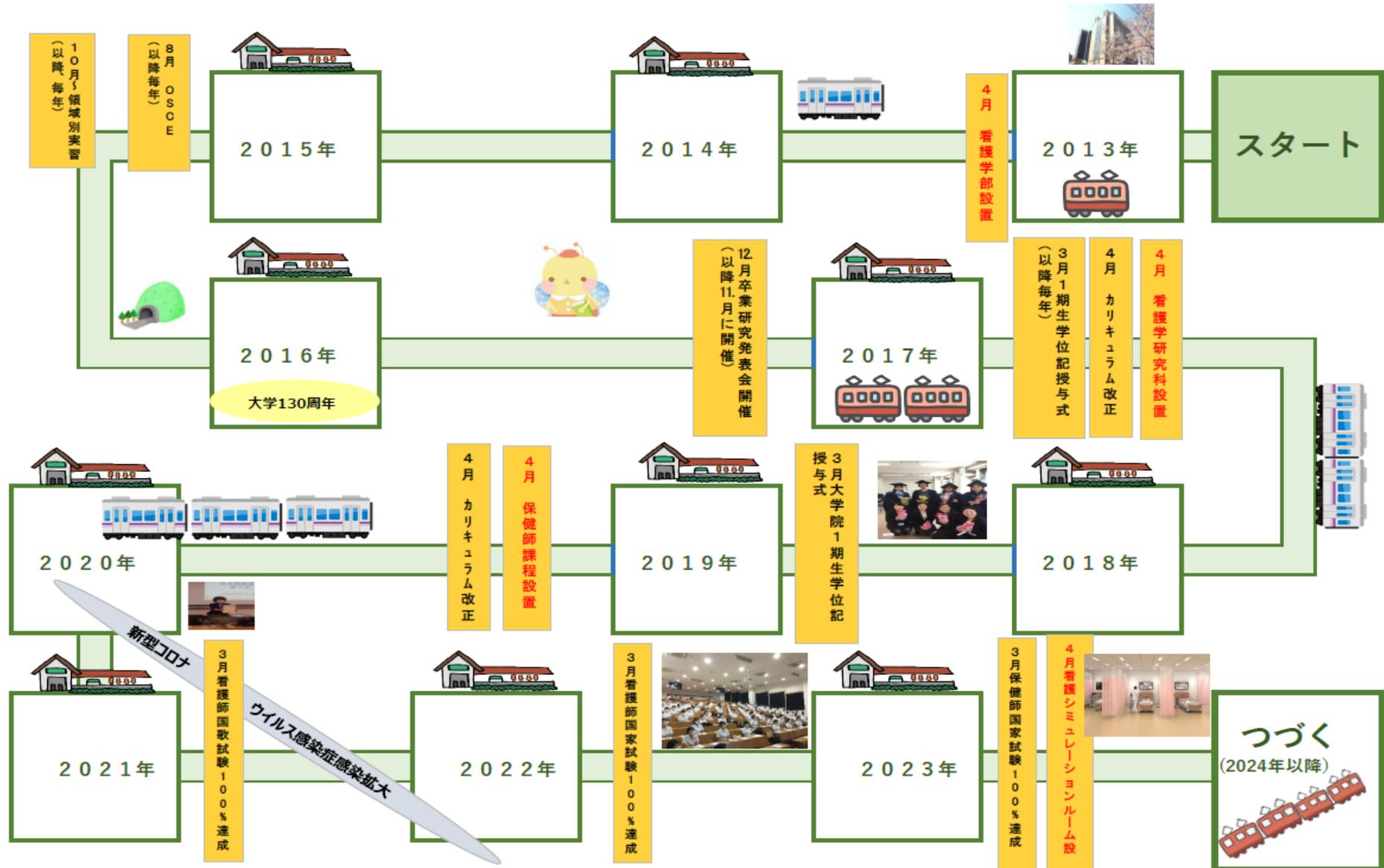
3 つ目は環境の良さです。私は本当の病室のようにになっている実習室が特に印象に残っています。私が卒業して 2 年が経とうとしていますが、今看護学部では保健師の国家試験受験資格が取得できたり、シミュレーションルームや電子カルテシステムが設置されたりと、とても進化していると感じました。より病院と近い環境で学べることはとても魅力的です。これからもさらなる進化、歴史を刻んでいかれることを期待しています。そして、共立の魅力は東京のど真ん中にある立地の良さだと思います。看護学部には付属の病院がないからこそ、様々な病院に実習に行け

たことがとてもよかったです。多くの病院を見る中で、それぞれの病院の雰囲気や特徴を知ることができ、どんな看護が自分に合っているのか、どんなふうに通きたいのか、イメージを膨らませることができました。大学からは皇居や東京駅も近く、空いた時間に友人と散歩をしたり、ランチをしたりしたことも思い出に残っています。とても良い環境で4年間学ぶことができました。共立で学んだことが原点となり、私は今看護師として楽しく働いています。ありがとうございます。共立女子大学看護学部の益々の発展を願ってメッセージとさせていただきます。

学生の皆さんへ

看護学生としての大学生活は、大変なことも多いと思いますが、それ以上に得られるものがたくさんあります。あっという間な4年間です。自分なりに楽しんで良いものにしてほしいと思います。そしてこれから、看護師として一緒に働くことを楽しみにしています。

## 6. 看護学部 10年のあゆみプラス



## 編集後記

看護学部 10 周年を迎えることができたのは、大学内外に限らず、多くのみなさまが、看護学部学生・卒業生を見守り、ご指導くださったおかげであると感謝致します。10 周年記念事業の検討にあたり、委員会では 10 周年のコンセプトをどこに置くのかを重視しました。10 年間で振り返りつつ、それが“10 年後の看護学部”にどのようにつながっていくことができるのかという、未来志向により取り組んで参りました。

10 周年記念事業の準備・開催にあたっては、学部を超えて大学全体でサポートを頂いたことも、改めてお礼申し上げます。

それにもかかわらず、10 周年記念誌の発行が当初より遅れたことで、本記念誌の表紙のデザインを描いてくださった堀 啓二前学長に直接ご報告できないままとなってしまいました。少し時間をおいて 10 周年の記念事業を振り返る中で、堀前学長にご相談申し上げた際に、いつも看護学部のことを応援してくださっていたことが思い出されました。堀先生、本当にありがとうございました。

### 共立女子大学看護学部 10 周年記念事業検討・実施特別委員会（2023 年度）

委員長	河原 智江
委員	中原 るり子
	松本 里加

### 学生運営サポート委員（2023 年度）

4 年	石見 友梨奈	岩崎 結衣
	平栗 沙希	衛藤 彩夏
3 年	戸頃 樹	遠山 美玲
2 年	田口 未来子	

10 周年記念誌

発行：2025 年 7 月 1 日

共立女子大学看護学部看護学科

無断複写及び転載を禁止します。